坂口安吾と小平事件

メタデータ	言語:
	出版者: 明治大学大学院
	公開日: 2024-03-27
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 金井,雅弥
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000309

国際日本学論集第19号　'24・2
研究論集委員会　受付日　二〇二三年九月二一日
承認日　二〇二三年十月三〇日

坂口安吾と小平事件

Sakaguchi Ango and the Kodaira Incident

博士後期課程　国際日本学専攻　二〇二三年度入学
金　井　雅　弥
KANAI Masaya

【論文要旨】

本研究は、坂口安吾にとって戦後世間を騒がせた連続殺人事件である小平事件が重要なものであったことを明らかにした。安吾が小平事件に関心を持っていた問題は三つの時期ごとに整理できる。①人を理不尽に殺す存在の問題（一九四六年一〇月～）。小平は、安吾の代表的なエッセイの一つ「文学のふるさと」（『現代文学』一九四一年七月）で特徴的に用いられていた「救ひ」や「むごたらしさ」という言葉で捉えられていた。②内在的な問題（一九四七年一二月～）。安吾はこの時期になると、小平のような犯罪の要素は我々にもあると、自身の問題として語ろうとしていた。③戦争中の倫理の問題（一九四八年三月～）。安吾は、人々が「無感動」に陥ってしまった一方で、小平のみが本来持ち得るべき人間性の重要な要素を失わずにいたことを語っている。こうした一連のテクストから、安吾が「救ひ」や「むごたらしい」という言葉を重要視し続けていたこと、戦後の時代に人を理不尽に殺す存在を想定していた理由、小平に両義的な意味を見出していたことを論じた。それは「文学のふるさと」で考えられていた問題が、小平という存在を通して思考されていたことを意味する。

【キーワード】

小平義雄　犯罪事件　文学のふるさと　救い　むごたらしい

一　はじめに

一九四六年八月一七日、増上寺境内の草むらで、全裸の女の死体と白骨化した死体が発見された。翌一八日には、次のような記事が新聞[1]に掲載されている。

芝山内　女二人の怪死体　一人は全裸、他は半ば白骨化して

一七日午前十一時ごろ芝区増上寺境内供養塔裏山で大森区大森五の一〇三木樵古沢新三（四三）さんが作業中山の北側傾斜笹やぶのなかに全裸の婦人の絞殺死体があるのを発見、付近の赤羽橋派出所に届出た。愛宕署員が現場に急行調査に参つたが、現場にはその全裸死体から約十メートルはなれたところにもさらに半ば白骨となつた婦人の死

体を発見警視庁捜査第一課ではたゞちに同署に捜査本部をおき捜査を開始した

全裸の死体は年齢二五歳、日本手拭で絞殺され、死後約十日を経過、付近には履物、下駄などの遺品も全然残されてゐないまた半ば白骨死体となつた婦人は年齢二十歳前後と推定され、白の半袖シヤツに、黒つぽいスカート、白軍用靴下をはき死後一ヶ月を経過してゐる、いづれも身許不明、死後の時間的経過からみて別個の犯行とみられてゐるが両死体とも暴行を加へられた形跡がある、現場は笹藪が身の丈ほど一面に生ひ茂つてをり都心とはいへ増上寺境内は人通りも稀で死体の発見も遅れ捜査は相当困難視されてゐる、なほ現場付近には以前にも迷宮入りとなつた女中殺し事件があつた

この報道から二日後、八月二〇日に小平義雄という人物が全裸の女を殺害した犯人として逮捕される。翌日には「芝山内―娘殺し犯人捕る」[2]と報道された。ここから捜査と小平の自白によって、次第に犯行の全貌が明らかになっていく。この事件は瞬く間に人々の注目の的となり、連日報道がなされた。後にこの事件は、小平事件と呼ばれるようになる。

小平事件は、若い女性が幾人も殺されたことから、犯罪史に残る猟奇殺人事件として今日においても知られており、小説や映画等でしばしば題材やモデルになっている[3]。

文学史上、小平事件に強い関心を抱いていた作家の一人に坂口安吾がいた。安吾は小平事件が報道された当初はもちろん、メディア上で騒がれなくなっても、長期にわたって繰り返し小平事件に言及していた。犯罪の問題をテーマとした「世相放談」という座談会[4]では、安吾は犯罪というものを考え」た時に「悪質と良質」があるとし、その「悪質」の例として「例えば小平みたいな、これは許すべからざる犯罪」と発言している。このように、安吾にとって犯罪という問題を考える上で代表的な例として挙げられることもあった。なぜ安吾はここまで小平事件に関心を抱いていたのだろうか。

本稿では、小平事件について安吾が言及している文章を追っていくことで、安吾がその時々でどのような問題意識を小平に見出していたかを明らかにする。これから詳しく見ていくように、安吾は他の小説家や世間の小平事件に対する捉え方とは異なる独自の関心の向け方を持っていた。そして、それは安吾文学の重要なテーマと深く関わるものであった。

二　小平義雄と小平事件の報道

犯人である小平義雄という人物は、どのような人間であったのか。そして、彼の犯罪はどのようにメディア上で取り上げられていたのか。安吾の小平事件に対する言及を見る前に、その詳細を確認したい。

小平義雄は一九〇五年に栃木県日光町で生まれた。一九歳の時に横須賀海兵隊に入隊、一九二九年には海軍陸戦隊員として中国大陸に出兵している。小平はそこで強盗や強姦、殺人を繰り返していた。除隊後は結婚したが、小平に私生児がいることが判明し、妻と揉め、義父を殺害、他六名を暴行したことにより、懲役一五年の刑を受けた。一九四〇年には出所し、職を転々とした後、品川の海軍衣糧廠に勤務。一九四五年五月には同僚の女性を強姦、殺害した。この頃より、小平は犯行を重ねて

いった。一九四六年三月からは進駐軍兵舎で洗濯夫をしており、食糧や職の斡旋といった甘言により女性を騙し、同年八月に事件が明るみに出るまでにも女性を手にかけていた[5]。

先にも触れたが、事件発覚の発端は、一九四六年八月一七日に、増上寺境内の草むらで全裸の女の死体と白骨化した死体が発見されたことによる。三日後の八月二〇日に小平義雄が全裸の女を殺害した犯人として逮捕される。ここから小平の取り調べがはじまった。八月二九日には、六月一三日に発見された絞殺死体の事件の犯人が小平であることが自白によって判明[6]。その後も、次々と小平の自白によって幾人もの女性を殺害していたことが分かり、事件の全貌が明らかになっていた。

小平事件の実態が明らかになるにつれて、メディア上の報道はその猟奇性と性的な面を強調したものになっていく。この時期には「類例のない変質者」[7]や「人獣の世界　小平ざんげ」[8]などと報道されている。また、「処女の屍に恍惚」[9]という題をもって掲載された記事では、「小平義雄殺人暦」として犯行日や殺害された女性の名前、年齢、住所、小平が独房で書いた「小平のざんげ手記」からの抜粋などが掲載されている。このように、小平がどれほどの女性を殺害していたのか、なぜそのようなことをしたのかなど、小平事件の特徴を前面に出す報道がなされていた。

このように報道される中、一九四七年三月三日には、小平の公判が開かれた。傍聴席は三五〇席あったようであるが、開廷の一時間前には傍聴券が出尽くし、満席となった[10]ようである。当時の関心の高さがうかがえる。その後、計一三回に及ぶ公判の末に、一九四七年六月一八日に死刑の判決[11]が小平に下った。小平はこの判決に控訴[12]したが棄却[13]され、さらには最高裁判所に上告[14]するも、一九四八年一一月一六日に上告棄却の判決が下り死刑が確定[15]した。

三　人を理不尽に殺す小平義雄

坂口安吾が小平についてはじめて触れているのは、管見の限り、一九四六年一〇月一四日に掲載された「大根脚は隠せ＝風俗時評（下）＝」（以下「大根脚は隠せ」）[16]であろう。鉄道員が「親切」であるということが、彼らの「職責」に含まれるかどうかという話題の中で、安吾は旅人を自分の家に泊めるときの「親切」について語っている。

行きくれた旅人を泊めてやつた美談の主が、あいにくのことにその旅人が小平のやうな男で、親切にしてやつたおかげで締め殺されたらどうだらう。フランスの童話にも「赤頭巾」といふのがあつて、親切な少女が森の婆さんを見舞ひに行つて狼に食べられる話がある。だから親切にするなといふのではないので、親切にするなら小平や狼に殺されるのを承知の上で親切にしろといふのだ。親切にしてやつたのに裏切られたからもう親切はしないといふ人間は始めから親切などはやらぬことだ。

本当の親切とか美談とかといふものは裏切られることもないし、報酬を受けることもない世界だ。つまり小平だの狼の存在が常に予定せられてゐて、親切にしてやつたおかげで殺されても仕方がないと自覚せられて成立つてゐる世界なのである。即ち絶対の世界だ。

ここで安吾は「赤頭巾」の「狼」と小平を並立し、「親切にするなら小平や狼に殺されるのを承知の上で親切にしろ」と述べている。そして、「本当の親切」が行われる「世界」とは「小平だの狼の存在が常に予定」され、そうしたものに「殺されても仕方がないと自覚せられて成立つてゐる世界」、すなわち「絶対の世界」であると語る。

なぜ安吾は小平を「フランスの童話」である「赤頭巾」と結びつけるのだろうか。「フランスの童話」の「赤頭巾」というのは、シャルル・ペローの「赤頭巾」である。この「赤頭巾」は、安吾が一九四一年七月の『現代文学』で発表した「文学のふるさと」[17]の中で扱われている極めて重要な話であった。「文学のふるさと」は奥野健男が「坂口文学のすべての鍵」[18]と言うように、安吾の文学全体を貫く基本理念としてこれまで捉えられてきた。安吾は「赤頭巾」について次のように語っている。

シャルヽ・ペローの童話に「赤頭巾」といふ名高い話があります。既に御存知とは思ひますが、荒筋を申上げますと、赤い頭巾をかぶつてゐるので赤頭巾と呼ばれてゐた可愛い少女が、いつものやうに森のお婆さんを訪ねて行くと、狼がお婆さんに化けてゐて、赤頭巾をムシャ〳〵食べてしまつた、といふ話であります。（中略）その余白の中にくりひろげられ、私の目に沁みる風景は、可憐な少女がたゞ狼にムシャ〳〵食べられてゐるといふ残酷ないやらしいやうな風景ですが、然し、それが私の心を打つ打ち方は、若干やりきれなくて切ないものではあるにしても、決して、不潔とか、不透明といふものではありません。何か、氷を抱きしめたやうな、切ない悲しさ、美しさ、であります。

安吾はこのシャルル・ペローの「赤頭巾」に「可憐な少女がたゞ狼にムシャ〳〵食べられてゐるといふ残酷ないやらしいやうな風景」を見ており、それに「切ない悲しさ、美しさ」を見出している。

安吾はこの「赤頭巾」の「狼」と小平を「大根脚は隠せ」で並列するのである。つまり、小平は「狼」と同じように人を理不尽に殺す存在として安吾に捉えられているといえよう。

また、「大根脚は隠せ」では、小平や「狼」に「殺されても仕方がないと自覚せられて成立つてゐる世界」が「絶対の世界」と言われる。「絶対」という言葉の形容は先の「赤頭巾」の「狼」と同様に「文学のふるさと」でも行われていることであった。「文学のふるさと」では次のように語られている。

この三つの物語が私達に伝へてくれる宝石の冷めたさのやうなものは、なにか、絶対の孤独――生存それ自体が孕んでゐる絶対の孤独、そのやうなものではないでせうか。

「赤頭巾」を含めた三つの挿話は「絶対の孤独」を伝えてくれると安吾はいう。「大根脚は隠せ」で、小平に理不尽に殺される「世界」をあえて「絶対の世界」というのは、「文学のふるさと」で「孤独」が「絶対」と形容されていたように、残酷な「世界」がゆるぎなく変わることのないものであるということを強調するためなのではないか。

「大根脚は隠せ」とほぼ同様の内容が、エゴイズムという観点から同年一二月の『民主文化』で掲載された「エゴイズム小論」[19]でも述べら

れている。

行きくれた旅人を泊めてもてなしてやつたから美談だといふ。この旅人が小平のやうな男で親切に泊めたばかりに締め殺されたらどうするつもりなのだ。フランスの童話にあるではないか。赤頭巾といふ可愛い、親切な少女は森のお婆さんを見舞ひに行つてお婆さんに化けてゐた狼に食べられてしまふ話が。だから親切にするなといふのではなく、親切にするなら小平や狼に殺される覚悟でやれ、といふことだ。親切にしてやつたのに裏切られたからもう親切はやらぬといふ。そんな親切は始めからやらぬことだ。親切には裏切りも報酬もない。小平や狼の存在が予定せられ、親切のおかげで殺されても仕方がないといふ自覚の上に成立つてゐる絶対の世界なのである。

安吾はここでも、「親切」にするのならば、小平や「狼」に「殺されても仕方がない」といふ「覚悟」でやり、そうした「自覚の上に成立つてゐる」世界を「絶対の世界」であると言っている。

このように、小平は「文学のふるさと」で扱われる「赤頭巾」の「狼」と並べられ、人を理不尽に殺す存在として安吾に捉えられていたといえよう。

ここで、安吾のこの捉え方が特異であったことを確認するためにも、同時代の作家らの小平事件に対する反応と見比べてみたい。小平事件にもっともはやく反応を示したのは海野十三である。海野は「下駄を探せ」[20]で、探偵と記者の会話という形式によって小平事件の真相を推理している。ここでは小平の心理を「変態心理」とし、その猟奇性を指摘している。また、江戸川乱歩も小平の犯罪心理を分析[21]している。乱歩は小平を「殺人淫乱症」であるとし、人間を殺害することに快感をおぼえる快楽殺人者として捉えていた。加えて、木々高太郎も「小平は殺すことに快楽をおぼえる一種のサデイズム（嗜虐性）で精神病の一環として世界にもかゝる共通の現象、犯罪の例は多い」[22]と同様の主張をしている。

このように、同時代の作家らはメディア上の報道と同じように、小平を社会から逸脱する存在として捉えていた。一方で、安吾は「文学のふるさと」で語られていた「赤頭巾」の「狼」と同様の存在として小平を捉えていた。つまり、同時代の作家らが人々の興味をかきたてながら娯楽的に消費される存在として小平を捉えていたのに対し、安吾は自身の文学的観点から小平を捉えていたのである。

四　救いのない小平義雄

安吾は小平事件に言及するのにあたって、「文学のふるさと」のキーワードをさらに用いていく。「エゴイズム小論」の次に小平が触れられているのは生前未発表原稿の「抗議三つ」である。執筆時期は「一九四七年四月頃」と推定[23]されており、安吾は三つの事柄[24]に対して言及している。以下の引用はそうした事柄の一つである、小平の報道に対するものである。

小平の公判といふ記事を読んだ。五つの大新聞で読んだけれども、

死んだ女を三度姦したとか、あの娘は抵抗しないのに殺したとか、なぜ、そんなことを書かなければならなかつたのですか。エロとかデカダンスとかヂャーナリズムは言ふが、この記事自体に於て、あまりに甚しく救ひがないではありませんか。文学に就て言ふのは、言ひわけめいて厭だけれども（なぜなら僕はエロ作家ださうだから）文学には善に向ふ志向がある。それ故に救はれてゐるのだけれど、小平の記事にはそれがない。（と、僕は信ずる。ネスパ）

新聞が、報道のリアリズム以外に何ものもないのならば、それでよろしい。モラルにも関連をもつものものならば、かゝるリアリズムに就て、一考さるべし。

ここでは小平の公判がどのように新聞上で報道されたのかという観点から、安吾は小平の記事に対して言及[25]している。小平の記事は「あまりに甚しく救ひがない」と語られる。「死んだ女を三度姦したとか、あの娘は抵抗しないのに殺した」と書かれたことに対して「救ひがない」と言うのである。安吾は新聞の記事がただものごとをありのまま報道する「リアリズム」であることを批判している。そして、小平の記事には「文学には善に向ふ志向」がなく、だからこそ「救はれて」いない。

では、どうしたら小平の記事において「救ひ」があることになるのだろうか。「救ひ」という言葉も「文学のふるさと」のキーワードであった。「文学のふるさと」において「救ひ」は以下のように語られる。

この三つの物語には、どうにも、救ひやうがなく、慰めやうがありません。（中略）それならば、生存の孤独とか、我々のふるさと、いふものは、このやうに、むごたらしく、救ひのないものでありませうか。私は、いかにも、そのやうに、むごたらしく、救ひのないものだと思ひます。この暗黒の孤独には、どうしても救ひがない。我々の現身は、道に迷へば、救ひの家を予期して歩くことができる。けれども、この孤独は、いつも曠野を迷ふだけで、救ひの家を予期すらもできない。さうして、最後に、むごたらしいこと、救ひがないといふこと、それだけが、唯一の救ひなのであります。モラルがないといふこと自体がモラルであると同じやうに、救ひがないといふこと自体が救ひであります。

安吾は「赤頭巾」を含めた「三つの物語」を「どうにも、救ひやうがなく、慰めやう」がないといい、「生存の孤独」や「ふるさと」が「むごたらしく、救ひのないものだ」とする。そして、「むごたらしいこと、救ひがないといふこと、それだけが、唯一の救ひ」であると言う。考察は後述するが、ここではまず「救ひ」や「むごたらしい」という言葉が「文学のふるさと」でキーワードになっていることを確認したい。

「文学のふるさと」であげられる「赤頭巾」の「狼」のように、「抗議三つ」で主張されているのは、理不尽で凄惨な話として捉えなければそこに「救ひ」は見出されないということである。そして、そのように「救ひ」がないということが「ただ唯一の救ひ」というように、安吾は逆説的に「救ひ」を見出していくことを文学における「善に向ふ志向」と言っているのである。小平の報道ではこうした逆説的な「救ひ」のある話と

して小平は受け取られていない。小平の記事は、性的な興味を娯楽的に誘うように書かれてしまっているために、安吾は純粋に凄惨な「救ひ」のないもの、すなわち逆説的な「救ひ」の存在として語られなければならないと主張しているのではないか。

また、同時期の一九四七年五月二日に掲載された「貞操の幅と限界」[26]にも小平についての言及がある。この文章では安吾の貞操や処女に対する考えが述べられている。

女房の貞操にはもう魂がなく、亭主への義務だけだから、義務などはたよりない代用品で、小平が述べたごとく、処女は抵抗する故に殺され、あまたの人妻は抵抗せぬために放免された由、女房の貞操は惨たるものである。もつとも貞操ぐらい何でもない。

貞操ぐらいで殺されるなんてそんな勘定の合わないソロバンがあるものかとおつしやるなら、まことにその通り、命に代えても貞操をまもれなど、無理難題を言い得るものではない。（傍線部引用者）

ここでは「処女は抵抗する故に殺され、あまたの人妻は抵抗せぬために放免された由」[27]と小平の発言を引き合いに出している。命を奪われるくらいならば、貞操などにとらわれることはないという文脈で安吾は小平に触れる。ここで小平は「抵抗する」女性を殺す理不尽な人物として捉えられている。

こうした「文学のふるさと」で考えられていた「救ひ」の問題を安吾は小平を通して思考し続けていたように思われる。その後、安吾は小平をより直接的かつ純粋に逆接的な「救ひ」の存在として語ろうとしていく。

次の文章は一九四八年一二月の『漫画』に掲載された「哀れなトンマ先生」[28]である。この文章は一九四八年一月、東京都豊島区長崎町の帝国銀行椎名町支店でおこった強盗事件[29]の犯人について安吾が語っているものである。安吾は帝銀事件の犯人をトンマな馬鹿者というが、その犯人と対比する形で小平を次のように語る。

私が、ヒドイ奴だと思つたのは小平といふ先生で、この先生はイヤだつた。どうにも、むごたらしくて、救ひがない。まるで、それがオキマリのやうに、必ず女の子をヒネリ殺して、この先生は人間らしい苦しみは殆どもたなかつたに違ひない。これは、やりきれないことです。（中略）私は小平先生は、イヤらしく、汚らしく、にくらしくて、たまりませんが、帝銀先生は、今でも、さう、悪者だと思つてゐません。（傍線部引用者）

帝銀事件の犯人とは異なり、小平は「必ず女の子をヒネリ殺」す「人間らしい苦しみは殆どもたなかつた」「むごたらしくて、救ひがない」人物として語られている。「救ひ」が「文学のふるさと」で使われているキーワードであったことは先に確認したが、「むごたらしい」という言葉も「文学のふるさと」で使われていたものであり、「救ひ」と併せて用いられているものであった。

以上のように小平は「文学のふるさと」で用いられる「救ひ」や「むごたらしい」といったキーワードで形容されながら、理不尽に人を殺す

存在として語られていた。

五　誰しもに内在する小平義雄

さらに安吾は一九四七年一二月の『座談』に掲載された「阿部定さんの印象」[30]で、小平について言及している。この文章は阿部定の猟奇的な犯罪[31]について述べているものである。

どんな犯罪でも、その犯罪者だけができるといふものはなく、あらゆる人間に、あらゆる犯罪の要素があるのである。小平も樋口も我々の胸底にあるのだ。けれども、我々の理性がそれを抑へてゐるだけのことなのだ。中には、とても、やれないやうな犯罪もある。（中略）お定さんの問題などは、実は男女の愛情上の偶然の然らしめる部分が主で、殆ど犯罪の要素はない（中略）然し、お定さんが、十年もたつた今になつて、又こんなに騒がれるといふのも、人々がそこに何か一種の救ひを感じてゐるからだと私は思ふ。救ひのない、たゞインサンな犯罪は二度とこんなに騒がれるものではない。小平の犯罪などは、決してこんなに再び騒ぎたてられることはないだらう。（中略）お定さんの場合は、更により深くより悲しく、いたましい純情一途な悲恋であり、やがてそのほのぼのとしたあたゝかさは人々の救ひとなつて永遠の語り草となるであらう。

安吾は「お定さんが、十年もたつた今になつて、又こんなに騒がれるといふのも、人々がそこに何か一種の救ひを感じてゐるからだ」という。阿部定について言われている「救ひ」は「文学のふるさと」で語られている「救ひがないといふこと自体が救ひ」という、逆説的な「救ひ」ではない。阿部定においては、エログロと騒がれながらも、人々が共感するような「純情一途な悲恋」を見出すからこそ、そこに救いを感じるのであろう。他方「小平の犯罪などは、決してこんなに再び騒ぎたてられることはない」「インサンな犯罪」と安吾は述べる。すなわち、小平事件を純粋に凄惨な事件として捉えているこちらが「文学のふるさと」で言われている逆説的な「救ひ」であり、安吾は小平の犯罪には「救ひ」がないということを間接的に述べている。

ただし、安吾はこの頃から、逆説的な「救ひ」の問題について、「救ひ」のなさをもたらす側、つまり、人を理不尽に殺す側に誰しもなりうるという、人間の内在的な問題からも小平を論じ始めるようになる。「阿部定さんの印象」では、この時期に世間の話題にあがった財閥令嬢誘拐事件の犯人である樋口芳男とともに、小平は犯罪者であると語られる。そして、彼らのような「犯罪の要素」は「我々の胸底」にあり、それを「理性」が抑えているだけのことであるとされる。

同様の主張は一ヶ月前の同年一一月の『婦人雑誌』に掲載された「男女の交際は自然に」[32]にも見られる。安吾によれば、「小平も樋口も我々の心に住んで」いるという。このことを安吾は繰り返し語っており、それより一か月後の「現代の詐術」[33]には「あらゆる人間といふものが、あらゆる罪人を自分の心に持つてゐるものだ。小平も樋口も我々の心に棲んでゐる」とある。そして、後年の一九五一年四月の『新潮』に発表された「フシギな女」[34]にも「小平のやつたことは、とにかく人間の魂

の奥をさがせば覚えのあることだから」と、同様の内容が見られる。人間ならば誰でも小平のようになりうるという、内在的な問題として小平は捉えられているのである。

また、誰もが犯罪の要素を持っているがそれを抑え込んでいるという構図についてより詳しく述べているのが、一九四九年六月の『文藝春秋』で掲載された「精神病覚え書」[35]である。この文章は安吾が東大病院神経科に入院していたときの体験が語られているものである。ここで安吾は精神病患者について述べている。

つまり患者としての僕がその時最も欲してゐるものは、たゞ一つ、抑圧、それに外ならなかつたのだ。抑圧を解放してはならないのだ。あらゆる抑圧を解放すれば、人間がどうなるか、分りきつてゐる。色と慾。たゞ動物。それだけにきまつているのだ。（中略）一般に、犯罪者と精神鑑定とは離るべからざるやうに見られてゐるが、テンカンの場合とか、異状発作の場合とかはとにかくとして、たとへば小平の場合などは、これを精神異状と云ふのは奇妙であり、明らかに、「犯罪者」という別の定義があるべきではないかと思つた。一般に、精神病の患者は、自らに科するに酷であり、むしろ過度に抑圧的であつて、小平のやうな平凡さ、動物的な当然さはないものである。精神病者が最も多く闘つてゐるものは、むしろ自らの動物性に対してであり、僕が小平を精神異状ではなく、むしろ平凡であり、単に犯罪者であると定義する所以はこゝにあるのである。精神病院の患者は自らに科するに酷であり、むしろ一般人よりも犯罪に縁が遠い、と僕は思つた。

ここで小平は「犯罪者」と「精神病者」とが比較される際の「犯罪者」の例として挙げられている。「精神病者」は「過度に抑圧的」であり、自らの「色と慾」である「動物性」と闘っている者であるとされる。「阿部定さんの印象」では「小平も樋口も我々の胸底にあるのだ。けれども、我々の理性がそれを抑へてゐるだけのことなのだ」と言われていた。「精神病覚え書」で言われている「抑圧」とは、このような「理性」と同様なものであるといえるだろう。つまり、「理性」に忠実であればあるほど、人は過度に「抑圧的」になり、「精神病者」になってしまう。反対に、「動物性」と闘うことなく「抑圧」されていない小平は「犯罪」的なのである。

このような小平を内在的な問題から捉える見方は安吾特有のものに見えるが、実は同時代でも共有されたものであった。小平の公判がはじまると、小平事件について座談会が組まれるようになる。小平の公判を大下宇陀児と共に特別席で傍聴[36]した江戸川乱歩は、彼とともに小平事件主任警部の金原警部や医学博士の浅田一、警視応衛生技師の金子準二といった面々と座談会[37]を行っており、小平について次のように語る。

女を見れば性欲が起ると云ふのは動物的な本能であつて、誰にもあるものなのです。それはちつとも不思議じやない。問題はそれを抑へるか抑へないかにある。普通の人間は何千年来の道徳や習慣によつて、これを抑へるやうになつてゐる。それが抑へられないといふのは、やはり普通の人間ではないですね。凡て犯罪者といいふのは普通の人に

は抑へられる欲望を抑へ得ない人間ですね。

人間には「動物的な本能」があり、「普通の人間」はそうした「本能」を「抑へ」ていると乱歩は言う。また、乱歩は同様の主張を繰り返している。乱歩は当時捜査一課課長であった堀崎との「犯罪事件と探偵小説」[38]と題された対談で以下のように語っている。

あゝいう犯罪心理は、誰にでもあるんじやないですか?それを一般の人は、理性や教養、習慣、そういつたもので押さえているので、押さえきれない謂わゞ弱者が犯罪者になるのでしよう。

ここでも、誰しもが犯罪者になる要素を持っており、それを抑えられないものが「犯罪者になる」という主張を読み取ることができる。

医学博士であった竹村文祥は「あれは誰でもやる可能性のあるものだ、たゞ、万人のかはりに小平がやつたまでのことで、いはゞ小平は一つの犠牲者にすぎない（中略）などといふ風に、平気で言ひ放つ街の性論家もありました」[39]と語っている。後年ではあるが、高見順も自伝的長編小説である「わが胸の底のここには」[40]で以下のように語る。

終戦後、やれ少女誘拐の、やれ小平事件のと、性慾にもとづく邪悪な犯罪が目立つてきて私の眉をひそめさせてゐるが、その私にだつてかゝる犯罪者的要素は多分にひそんでゐたのである。それがどうにか犯罪者になれずにすんだのは、何のお蔭であらうか、私を性犯罪者に堕さずにおいたものは、何か。それは理性であるか。それとも私の得意の虚栄心のせいであるか。空想の実行が他人に露呈した際の恥晒しを恐れるところの虚栄心。

高見はその原因を「理性」か「虚栄心」かと自問しているが、小平のような「犯罪者的要素」が自身に「多分にひそんでゐた」と回想している。

以上のように、小平は「我々の心に住んで」おり、「理性」や「抑圧」がなければ、誰もが「犯罪者」になってしまうという安吾の捉え方は、同時代に広く共有されたものであった。

ただし、小平を内在的な問題から捉えるということは安吾にとって特に重要な意味を持っていた。先にも確認したが、安吾は小平を「文学のふるさと」で挙げられる「赤頭巾」の「狼」と同様に人を理不尽に殺す存在として捉えていた。つまり、「文学のふるさと」が書かれた頃から重要なこととして考えていた「救ひ」や「むごたらしい」という問題意識の延長から小平を捉えていたのである。そして、そうした小平が内在的な問題から捉えられるようなったということは、「文学のふるさと」で考えられていた人を理不尽に殺すという話が、安吾にとって自分自身の問題として捉えられるようになったということを意味している。

六　戦争の中の小平義雄

さらに小平について詳細に述べられた安吾の文章がある。一九五二年一〇月の『文学界』で発表された「もう軍備はいらない」[41]である。「もう軍備はいらない」は『文学界』の特集「再軍備と作家」に掲載された

作品であり、当時、話題となっていた再軍備に対して書かれたものであった。小平が戦争と結びつけて語られている点で、「もう軍備はいらない」はこれまで扱ってきたものと異なる。

小平某という奴があの最中に女の子を強姦しては殺していたという。あの最中に人を殺すとは妙な奴だ。つまり、人を殺すという良心——人を殺して自分の生きのびる手段にしようという尋常な良心が、まだ麻痺しないでノルマルに動いていたらしいや。

一時間後には自分がどうなるか分りやしないということが唯一の人生の信条となりきつていた筈のあの最中に、自分の罪を隠すために人を殺すというような平常の心がチャンと時計のように動いているのは異常なことさね、あの場合に於てはまさに驚くべき良心だね。

あの時の大半の人間というものは自分の手で人を殺すことも忘れていたようなものだ。どうせみんな死んじまい、焼けちまい、バラバラになつちまうんだ。我々の理性も感情も躾けもみんな失われ一変して、戦争という大きさのケタの違うデカダンが心や習性の全部にとつて代つていたのだ。それに比べると、小平某はあの最中に良心もタシナミも失わず、はるかにデカダンではなかつたのさ。あの野郎はフテエ野郎だというのは戦争がすんでからの話さ。

いつたん戦争になツちまえば、健全なのは小平君ぐらいのもので、人間は地獄の人たちよりもはるかに無感動、無意志の冷血ムザンな虫になるだけのことだ。

ここでは「自分の手で人を殺すことも忘れていたような」「無感動、無意志の冷血ムザンな虫」状態に人々が陥っていた中で、小平だけが「良心もタシナミも失わず」にいたことが語られている。この文章について福岡弘彬[42]は、多くの人が戦争中には「無感動、無意志の冷血ムザンな虫」になってしまっていたことに焦点を合わせて論じている。しかし、この文章の特色はむしろ、それと対比されている小平に関する表現にある。戦争によって人々が意志を失ってしまうという問題については、福岡もジョルジョ・アガンベンや大澤真幸[43]を挙げているように、多くの人が指摘する問題である。しかし、それを問題とする上で、小平のような犯罪者だけが「良心」を持っていたと形容するのが安吾独自の点である。

第二章で確認した通り、当時の言説において、小平は専ら異常な存在として語られていた。安吾が「尋常な良心」「ノルマル」「平常の心」「驚くべき良心」「タシナミ」「健全」といった言葉で小平を形容しているのは、明らかに当時の一般的な捉え方を逸脱しており、安吾はその逸脱した表現を繰り返し用いている。つまり安吾は、小平が「無感動」に陥っていた人々と異なり、戦争中いかに人間のあるべき姿を失わずにいたのかを強調しているのである。安吾は人間の保持しておくべき重要な価値を小平に積極的に見出していた。

安吾は「我々の理性も感情も躾けもみんな失われ一変して、戦争という大きさのケタの違うデカダンが心や習性の全部にとつて代つていたのだ」と言う。戦争では、「理性」だけではなくそれが抑えている本能的な部分の「感情」も失われ、戦争によってもたらされた頽廃にとって代

わってしまったと言うのである。そして、人々は「無感動、無意志の冷血ムザンな虫」になってしまう。つまり、「もう軍備はいらない」では、動物性を抑えている「理性」といったものはもちろん、「我々の胸底」にある動物性――本来人間が持っているべきはずの重要な要素――でさえ戦争中は失われていたことを安吾は語っているのである。だからこそ、安吾は戦争中にそれを失わずにいた小平を評価しているのではないか。

七　「文学のふるさと」のその後

ここまで見てきたように、安吾は小平について、さまざまな側面から自身の文学観、人間観を考えていく手がかりとしていた。ここで、安吾の言及を改めて時期ごとに整理しておく。

一九四六年八月二一日に小平が逮捕された直後の一〇月から安吾は小平について論じ始めていた。小平を「赤頭巾」と並べながら「絶対」という語彙で形容し、一九四八年一二月までは「救ひ」のなさをもたらす存在として扱っていた。これは小平への関心が「文学のふるさと」で扱われた「むごたらしく、救ひのない」存在の問題の延長線上にあったことを示している。そして、こうした「救ひ」のない存在に、安吾は逆説的な「救ひ」を見出していた。

こうした「救ひ」をキーワードとして小平を語る文章の中に、人間の誰にでも内在する問題として捉えるものが現れ始めるのは、一九四七年の末頃である。小平の犯罪を阿部定事件と対比して「救ひ」がない側に位置付ける一九四七年一二月の「阿部定さんの印象」では、小平のような「犯罪の要素」は「我々の胸底」にあると安吾は主張する。安吾は「文学のふるさと」で扱った「救ひ」のなさをもたらす存在のことを、小平について考えることを通じて内在的な問題として考えていったことがうかがえるのである。こうした内在的問題としての捉え方は一九五一年四月まで繰り返し表明される。

一九五二年一〇月の「もう軍備はいらない」では、戦争中に見た「無感動」な状態の人々と対比される形で、戦争中の倫理の問題として小平の存在は改めて位置づけられている。ただしこれは突然出てきた問題ではなかった。一九四八年一二月の「哀れなトンマ先生」で、安吾は帝銀事件の犯人と小平を対比しているが、それに先立つ一九四八年三月の『中央公論』に発表された「帝銀事件を論ず」[41]で、安吾は帝銀事件の犯人に、「無感動」になってしまった戦争中の人間を見出すということを述べていた。この時点で既に、実質的には「もう軍備はいらない」のように小平を戦争中の人間という問題系の中に位置付け始めていたと考えられる。

以上のように、小平事件について安吾が言及する文章で関心を寄せていたことは、「文学のふるさと」で扱われていた「むごたらしく、救ひのない」存在、すなわち、人を理不尽に殺す存在の問題（一九四六年一〇月～一九四八年一二月）、内在的な問題（一九四七年一二月～一九五一年四月）、戦争中の倫理の問題（一九四八年三月～一九五二年一〇月）として捉えることができる。

このように「文学のふるさと」で考えられていた問題が、安吾が小平に言及する一連のテクストに見出せるということが理解できた。このことから、安吾が特に「文学のふるさと」のどの部分を重要視していたのかを再検討することができるのではないか。

「文学のふるさと」は、特に「ふるさと」や「絶対の孤独」というキーワードに焦点が当てられ分析[45]されてきた。それは、安吾作品においてこうした語が特徴的な形で数多く使われてきたためであろう。しかし、本稿で確認してきたように、「救ひ」や「むごたらしい」といった言葉も、「文学のふるさと」で使われているだけではなく、安吾によって特異な意味づけがなされていた。したがって、「救ひ」や「むごたらしい」といった言葉は、「ふるさと」や「絶対の孤独」と同様に、安吾文学を理解する際に着目すべきキーワードと考えるべきである。

「救ひ」という言葉について、これまではどのように理解されていたのか確認しておこう。早くには佐々木基一が着目[46]している。佐々木は「彼はなぜ「救い」などという坊主くさい言葉を捨て去ることが出来ないのだろうか」と、「救ひ」を仏教と結びつけて捉えている。花田俊典は佐々木のこの発言を「「文学のふるさと」の根底にある仏教的な雰囲気、それもすでに土着化した、したがって「ありふれた通俗」的な仏教臭を嗅ぎつけていることだ」[47]と評価している。花田は「救ひ」が「坊主くさい言葉」であるかどうかについて「当面の関心はない」とそれ以上は立ち入らないが、確かに悟りの境地のように仏教的な観点から「救ひ」を捉えることもできるかもしれない。しかし、佐々木や花田の解釈では、捉えきれない側面がある。なぜならば、「文学のふるさと」で語られる「救ひ」は、単なる「救ひ」ではなくあくまで「むごたらしい」「救ひ」だからである。仏教の「救ひ」の中には、「むごたらしい」という意味は含まれないのではないか。「文学のふるさと」の「救ひ」は「むごたらしい」という語と合わせて理解する必要がある。

「文学のふるさと」の『伊勢物語』第六段が挙げられる場面では、「救ひ」と共にキーワードであった「むごたらしい」という言葉について、詳しく語られている。

女を思ふ男の情熱が激しければ激しいほど、女が鬼に食はれるといふむごたらしさが生きるのだし、男と女の駈落のさまが美しくせまるものであればあるほど、同様に、むごたらしさが生きるのであります。女が毒婦であつたり、男の情熱がいゝ加減なものであれば、このむごたらしさは有り得ません。又、草の葉の露をさしてあれは何と女がきくけれども男は返事のひますらもないといふ一挿話がなければ、この物語の値打の大半は消えるものと思はれます。

つまり、たゞモラルがない、たゞ突き放す、といふことだけで簡単にこの凄然たる静かな美しさが生れるものではないでせう。たゞモラルがない、突き放すといふだけならば、我々は鬼や悪玉をのさばらせて、いくつの物語でも簡単に書くことができます。さういふものではありません。

ここでは、「女を思ふ男の情熱が激しければ激しいほど」や「男と女の駈落のさまが美しくせまるものであればあるほど」「むごたらしさが生きる」と語られている。そして、ただ「突き放す」だけでは「凄然たる静かな美しさが生れ」はしないという。「物語」において、「むごたらしさ」が活きるような仕掛けが施されるからこそ、安吾は「物語」の価値が生まれることを語っているのである。ここから、安吾は「むごたら

しさ」に重要な価値を置いていたことが理解できる。

「哀れなトンマ先生」で確認したように、安吾は「むごたらしい」存在として小平を捉えていた。そこでは「人間らしい苦しみは殆どもたなかつた」と小平は語られており、どこまでも理不尽な存在として捉えられなければならないということが述べられていた。このように、安吾は「文学のふるさと」が書かれた後になっても「むごたらしさ」に重点を置いていた。つまり、「文学のふるさと」で「それならば、生存の孤独とか、我々のふるさとゝいふものは、このやうにむごたらしく、救ひのないものでありませうか」と「救ひ」と「むごたらしい」という言葉を別個のものではなく共に使われるものと考えていたからこそ、「哀れなトンマ先生」でも「むごたらしくて、救ひがない」と、不離一体のものとして捉えていたといえよう。

「文学のふるさと」では、こうした『伊勢物語』第六段とともに「赤頭巾」や狂言「鬼瓦」が「私達」を「突き放す」話として挙げられる。井口時男は「赤頭巾」を民話の論理を用いて捉えている[48]。井口は「赤頭巾」がそもそもは口承説話であるといい、民話が「整序される以前の世界に容赦なく遭遇せざるをえない現実感覚を大きなモチーフとしている」としている。そして、民話の論理は「外部に対して無防備な貧しい共同体の論理」[49]であると述べる。安吾は、「無垢なる主人公は必らず救われるはず」である話、すなわち、主人公は幸福な結末を迎えるはずだということが前提になっている物語の論理に沿って「赤頭巾」を読もうとするも、民話の論理に阻まれ、「物語の持続の不意の切断に戸惑っている」と井口は指摘する。「赤頭巾」を民話の論理で読むべきところを物語の論理で読んでしまうからこそ、安吾は「突き放され」たのである。

「大根脚は隠せ」では、小平が「赤頭巾」の「狼」と並べられ、「親切にするなら小平や狼に殺されるのを承知の上で親切にしろ」という「絶対の世界」が語られていた。井口論を敷衍すれば、物語の論理ではなく民話の論理をもって「親切」をしなければならないということになる。また、「抗議三つ」では「記事自体に於て、あまりに甚しく救ひがない」と、小平の記事に「文学のふるさと」で言われている逆説的な「救ひ」がないことが語られていた。加えて、「哀れなトンマ先生」で小平は「むごたらしくて、救ひがない」と言われている。つまり、共同体の外部の「むごたらしく」、「救ひ」のなさをもたらす存在として、小平は捉えられているのである。

しかし、ここで疑問が生じる。なぜ、戦後の時代でさえも、民話の論理で世界を捉え、小平のような存在を想定しなければならなかったのだろうか。井口は「文学のふるさと」が「戦争」という「非常時」に書かれた「文学論」であるとし、「物語から突然放り出される感触」を「問題とせざるをえなかった背景には（中略）日常の持続を一挙に廃棄させた戦争という巨大な事件の衝撃が尾を引いていたと思われる」と、安吾が「突き放され」る感触を問題とするに至った契機が戦争であったことを指摘している。だが、「文学のふるさと」が書かれたのは一九四一年七月であった。「文学のふるさと」は、安吾の文学に多大な影響を与えた太平洋戦争[50]がはじまる前に書かれた作品である。「文学のふるさと」が書かれた時点では、安吾は目前の現在の世界を民話の論理で捉えていたわけではなかったのではないだろうか。確かに、すでに日中戦争が始

まっており、そうした民話の論理が前提となる世界が訪れるかもしれないという予感を安吾は持っていたかもしれない。しかし、「文学のふるさと」で挙げられる「赤頭巾」、狂言「鬼瓦」、『伊勢物語』第六段、芥川龍之介の遺稿は、どれもフィクションや過去の話であり、戦後の安吾にとっての小平のような現在の身近な存在が例に挙げられたわけではなかった。「文学のふるさと」では現在の現実を捉えることに主眼が置かれていたわけではなかったのではないか。

小平の犯行は、一九四六年八月に明らかになったが、最初の犯行は一九四五年五月[51]であり、戦中であった。つまり、小平事件は戦中から戦後かけての犯行であった。戦後、世界は変わったように見えたが、実は小平が存在するような民話の論理の世界が戦後と変わらず続いていたということを安吾は語っていたのではないだろうか。だからこそ、安吾は戦後の時代でさえも民話の論理で世界を捉え、小平のような存在を想定しなければならないと述べたのだろう。安吾が小平に言及している一連のテクストは、戦中も戦後の世界も凄惨な世界であったことを物語っているのである。

世界は戦争を機に変わったのでなく、戦後も依然として戦中のような状態が続いていたとするという捉え方は、先にも触れた「帝銀事件を論ず」でも語られていたことであった。ここでは、戦後の人々の生活がどのようなものであったか、次のように語られている。

われわれの四囲の現実というものは、戦争と同じように荒廃しきつているのである。戦争と同じように、と私はいつたが、私は戦争そのものを知らないのだ。ただ、戦争中における私の四囲の現実を知つていたが、恐らく大部分の人々がそうであるに相違なく、大陸でノンビリ戦争していた人々などは、そのころは衣食住は保障され、わがままは通り、今の現実にくらべれば、どつちが苛烈な戦地であるやら、これを通観して、今、戦争が終つた、などと、観念上に架空な言葉を押しつけても、四囲の現実というものは、なお戦争そのものなのである。戦争は終つた、という観念上の空言を弄して、この現実に新展開をもとめようとするのは、現実に魔法を行おうと試みるような幼稚なことで、現に荒廃せるこの様相をまずシカと認識してかからねばならぬ。すなわち、街は焼け野である。人は雑居し、骨肉食を争い、破れ電車に命をかけて押しひしめいている。（中略）盗人や殺人強盗というものは、私の青年期の不況時代にも、ずいぶん多かつた。不況時代となり、職を失い、窮すれば、平和な時代でも犯罪は絶えない。今は窮乏のドン底時代だから、その数が多く、かつ、戦争という悪夢の中で生育して冷酷さに無感動となつたために、いらざる血を見る事件がふえた。そこにハッキリ漂うものは戦争の匂いである。

戦争中、徴兵された作家も少なくなかったが、安吾は戦地には赴かなかった。そのため、「私は戦争そのものを知らないのだ」と実際の戦争を体験してはいないと述べている。しかし、安吾は「四囲の現実」が「戦争そのもの」であると言う。安吾によれば、戦後も戦争中と変わらず「街は焼け野」であり、人々の日常は物質的な不足から、個々の食料や日用品を奪い合い、生き抜くために争っている状況にあった。このような既

存のモラルが崩壊した日常は、人々にとって生きるか死ぬかという極限の状況であり、まさに戦争そのものであった。だからこそ、安吾は「四囲の現実」が「戦争そのもの」と述べるのである。また、安吾はこうした「四囲の現実」で起こる犯罪に「戦争の匂い」が「漂う」と言う。戦争中、人々は自分が生きるためには人を殺すことも厭わないという状況にあり、そうした状況が戦後にも続いていたからこそ、安吾は犯罪事件の犯人に「戦争の匂い」を嗅ぎつける[52]。小平に言及する一連のテクストで戦後が凄惨な世界であると安吾が語っているのは、「帝銀事件を論ず」で述べているように、戦後の世界では戦中のようにいつ殺されてもおかしくないという日常が広がっていたことを、身をもって体験していたからであろう。

また、安吾は「帝銀事件を論ず」で、帝銀事件の犯人を次のように語っている。

> あの焼け野の、爆撃の夜があけて、うららかな初夏の陽ざしの下で、七人の爆屍体を処理しながら、屍体の帽子をヒョイとつまんで投げだす若者の無心な健康そのものの風景。木杭よりもなおおそまつに焼屍体を投げころがす人々。
>
> 私の見たのはそれだけであるが、外地の特務機関だとか憲兵だとか、芋のように首を斬り、毒薬を注射して、無感動であつた悪夢の時間があつたはずだ。戦争というまことに不可解な麻薬による悪夢であり、そこでは人智は錯倒して奇妙に原色的な、一見バカバカしいほど健全な血の遊びにふけり麻痺しきつていたのである。
>
> 私は帝銀事件の犯人に、なお戦争という麻薬の悪夢の中に住む無感動な平凡人を考える。戦争という悪夢がなければ、おそらく罪を犯さずに平凡に一生を終つた、きわめて普通な目だたない男について考える。

ここで、安吾は帝銀事件の犯人に「戦争という麻薬の悪夢の中」に生き「無感動」に陥っていた姿を見ている。これは「もう軍備はいらない」で、人々が戦争中には「無感動、無意志の冷血ムザンな虫」になってしまっていたと語られていたことと同様のことである。ただし、「帝銀事件を論ず」が特徴的であるのは、戦後の事件である帝銀事件の犯人に、戦争中の「無感動」に陥ってしまっていた人々の姿を見ているという点である。

「帝銀事件を論ず」や「もう軍備はいらない」に限らず、「無感動」という人間の「麻痺」の問題は、ときに屍体を例える「焼鳥」という言葉で象徴されながら、安吾のテクストではたびたび描かれてきた[53]。そうしたテクストから分かるのは、安吾もそうした「無感動」に陥っていた一人であったということである。第六章で述べたように、安吾は小平に本来人間が持っているべきはずの重要な要素を見出していた。つまり、安吾自身も戦争中に「無感動」に陥っていたからこそ、戦争中にあるべきはずであった理想の姿を小平に見出しているのである。しかし、小平がいくら理想の姿であったとはいえ、幾人もの女性を殺害していた理不尽さは、人間のあるべき姿とは程遠い。安吾は小平に理想と理不尽さという両義性を見出していたといえるだろう。また、そのように小平に両義性を見ていたからこそ、小平を内在的な問題から捉えていったのでは

ないだろうか。そしてそれは、「文学のふるさと」で考えられていた「突き放され」るという問題から、人を理不尽に殺す存在、すなわち、「突き放す」存在に自身がなり得るかもしれないという問題に安吾の関心が移って行ったということを意味している。安吾は、「文学のふるさと」で考えていた「救ひ」や「むごたらしい」といった言葉に重きを置きながら、「突き放す」存在の問題を、小平を通して思考し続けていたのである。

付記　原則として漢字は新字に改め、引用・参考資料の副題、傍点、ルビは適宜省略した。なお、本稿は坂口安吾研究会　第三八回研究集会（於Zoom、二〇二二年三月六日）での発表に基づいている。研究会の皆様に感謝申し上げます。

1　「女二人の怪死体」（『読売新聞』一九四六年八月一八日）

2　「芝山内―娘殺し犯人捕る」（『読売新聞』一九四六年八月二一日）

3　映画『明治・大正・昭和　猟奇女犯罪史』（監督＝石井輝男、主演＝吉田輝雄、配給＝東映、一九六九年八月公開）は、実在の猟奇犯罪事件を題材にした、オムニバス形式の映画だが、その一つに小平事件が描かれている。また、近年では、坂口安吾「戦争と一人の女」を原作とした映画『戦争と一人の女』（監督＝井上淳一、主演＝江口のりこ・永瀬正敏、配給＝ドッグシュガームービーズ、二〇一三年四月公開）で、小平をモデルにした「大平」という人物が登場する。加えて、デイヴィッド・ピースが《東京三部作》の第一部『TOKYO YEAR ZERO』（文藝春秋、二〇〇七年一〇月）で題材にしている。

4　坂口安吾他「世相放談」（『モダンロマンス』一九五一年三月）。引用は花田俊典「〈新資料〉坂口安吾他・座談会「世相放談」――『定本坂口安吾全集』未収録資料――」（『文献探究』一九八四年六月）による。

5　小平の生い立ちについては、渡邊貞造「起訴提起さる」（『死の抵抗――小平義雄事件公判記録――』石狩書房、一九四九年三月）や福田洋・石川保昌「小平義雄事件」（『図説現代殺人事件史　増補新版』河出書房新社、二〇一一年三月）、鈴木厚「小平事件」（『戦後医療事件史』じほう、二〇一一年六月）などを参照。

6　「少女殺しを自白」（『読売新聞』一九四六年八月三〇日）

7　「類例のない変質者」（『朝日新聞』一九四六年九月二〇日）

8　「人獣の世界　小平ざんげ」『毎日新聞』一九四六年一〇月二六日）

9　「処女の屍に恍惚」（『毎日新聞』一九四六年一〇月二六日）

10　「〝あきらめに沈む告白〟」（『朝日新聞』一九四七年三月四日）

11　「小平に死刑の判決」（『読売新聞』一九四七年六月一九日）

12　「小平控訴」（『読売新聞』一九四七年六月二六日）

13　「〝小平〟控訴審でも死刑」（『読売新聞』一九四八年二月五日）

14　「小平、最高裁判所に上告」（『読売新聞』一九四八年三月四日）

15　「小平の死刑確定」（『読売新聞』一九四八年一一月一七日）

16　坂口安吾「大根脚は隠せ＝風俗時評（下）＝」（『時事新報』一九四六年一〇月一四日）

17　坂口安吾「文学のふるさと」（『現代文学』一九四一年七月）

18　奥野健男「解説」（『定本　坂口安吾全集』第七巻、冬樹社、一九六七年一一月）

19　坂口安吾「エゴイズム小論」（『民主文化』一九四六年一二月）

20　海野十三「下駄を探せ」（『読売ウィークリー』一九四六年八月二四日）。本作が発表されたのは八月二四日だが、作品末尾には「八月十八日記」と記されていることから、事件の報道されたその日に執筆されたことが分かる。小平が事件の犯人として逮捕されたのが八月二〇日であり、つまり、海野は犯人が小平と判明する前に本作を執筆したということになる。また、海野は翌年の四月、「下駄を探せ」で行った推理の答え合わせとして、「探偵小説と犯罪事件」（『ぷろふぃる』一九四七年四月。引用は『海野十三全集　別巻二　日記・書簡・雑纂』（三一書房、一九九三年一月）

による。）を執筆している。ここで「私の許へも某紙から問合わせがあった」と、「下駄を探せ」の執筆理由が書かれており、次に引用している江戸川乱歩を含めた探偵小説家が小平事件に対してコメントを出したのは、メディアから求められていたことが理由であると思われる。

21 江戸川乱歩「物慾より嗜虐性」（『東京新聞』一九四六年九月三〇日）

22 林髞「まれにみる嗜虐性」（『朝日新聞』一九四六年九月二一日）。医学部教授の肩書き、かつ、本名で掲載されているが、記事の前置きでは「慶応大学医学部教授（探偵小説家木々高太郎）」と紹介されている。

23 坂口安吾『坂口安吾全集』第一五巻（筑摩書房、一九九九年一〇月）に初めて収録された。本文の引用もこれによる。なお、同書の関井光男「解題」は「抗議三つ」の執筆時期を一九四七年四月頃と推定している。

24 「抗議三つ」では小平事件の報道に対する言及のほかに、煙草の値上げと、織田作之助の妻であった織田昭子に喫茶店をやらせるという話についての言及がある。煙草の値上げについては「ところで、今度、ピース、コロナ、三十円になるさうだけれど」と書かれているが、これは「一級酒は百二十円　ピース、コロナ三十円　四月から」（『朝日新聞』一九四七年三月二日）のことであると思われる。また、織田昭子に喫茶店をやらせるという話に関しては「某新聞が、織田作之助の奥さんが、織田の喀血をすゝつてやつたといふ美談に就て、多くの紙面をさいてゐた」と書かれているが、これは『読売新聞』の「気流　読者の欄」のおける「織田作之助の死」（『読売新聞』一九四七年二月一〇日）や、その一〇日後に掲載された「気流　読者の欄」（『読売新聞』一九四七年二月二〇日）のことであろう。この織田昭子の記事については、斎藤理生「作之助没後の世界で」（『小説家、織田作之助』大阪大学出版会、二〇二〇年一月）を参照のこと。

25 安吾は小平の公判を「五つの大新聞」で読んだというが、「五つの大新聞」とは、『朝日新聞』、『毎日新聞』、『読売新聞』、『東京新聞』、『時事新報』の五紙であると思われる。安吾は「横暴な新聞販売店」（生前未発表原稿、引用は『定本　坂口安吾全集』第一三巻（冬樹社、一九七一年一二月）による）で、「私は朝日、毎日、読売、東京、時事の五紙を購読している」と言っている。なお、同書の関井光男「解題」によれば、この文章は一九四七年頃に執筆されたとし、「エッセイではなく抗議文である」と指摘されている。小平事件の公判は第一回が一九四七年三月三日に開かれており、「五つの大新聞」でも小平の公判の様子がそれぞれ報道されていた。後述のもの以外では、「娘殺し三件否認」（『毎日新聞』一九四七年三月四日）、「三犯行を否認」（『東京新聞』一九四七年三月四日）、「「殺せばバレない」小平公判　第一犯行に自信」（『時事新報』一九四七年三月四日）と報道されている。

また、安吾が「抗議三つ」で「死んだ女を三度姦したとか、あの娘は抵抗しないのに殺したとか」と述べる内容と同様のものは、以下の二誌で確認できる。一つは『読売新聞』（「三つの犯行は否認　冷然と語る淫虐」一九四七年三月四日）で、公判の内容が「凶行の夜、三回にわたり死体をもてあそんだというのは興味的にもちかけられた警察の尋問に話に咲かせたまでゝす」と掲載されている。もう一つは『朝日新聞』（「〝あきらめ〟に沈む告白　「三つの殺人」は否認」一九四七年三月四日）で、「相手は特に抵抗はしませんでした、抵抗しないのに殺したのは三回四回と犯行をかさねたので」と報道されている。

26 坂口安吾「貞操の幅と限界」（『時事新報』一九四七年五月二日）

27 「人獣の世界　小平ざんげ」（『毎日新聞』一九四六年一〇月二六日）には、「処女の屍に恍惚」の見出しで小平が独房で書いた手記の抜粋が掲載され、殺害した一〇人の他に三〇人の女性を暴行したことなどが書かれている。暴行をした女性の中には「人妻が五人ゐ」たことや、「大部分が素直に」「いふことをきいた」という理由から暴行した女性を殺さなかったこと、亡くなった一〇人が「いづれも抵抗したから」殺したことなどが語られている。

28 坂口安吾「哀れなトンマ先生」（『漫画』一九四八年一二月）

29 鈴木厚「帝銀事件」（『戦後医療事件史』じほう、二〇一一年六月）を参照。

30 坂口安吾「阿部定さんの印象」（『座談』一九四七年一二月）

31 阿部定事件とは、一九三六年に恋人の男性器を切断して逃亡した阿部定による事件である。安吾は阿部定と実際に対談（「阿部定・坂口安吾対談」

『座談』一九四七年一二月）している。

32 坂口安吾「男女の交際は自然に」（『婦人雑誌』一九四七年一一月）

33 坂口安吾「現代の詐術」（『個性』一九四七年一二月）

34 坂口安吾「フシギな女」（『新潮』一九五一年四月）

35 坂口安吾「精神病覚え書」（『文藝春秋』一九四九年六月）

36 「三つの犯行は否認　冷然と語る淫虐」（『読売新聞』一九四七年三月四日）。特別傍聴席には、小平事件を担当した主任刑事や精神鑑定をした医者といった面々とともに、江戸川乱歩と大下宇陀児の姿が見られたようである。

37 「小平事件真相座談会」（『犯罪実話』一九四七年七月）

38 江戸川乱歩・堀崎「犯罪事件と探偵小説」（『Gメン』一九四七年一〇月）

39 竹村文祥「正しい性生活のために」（『主婦と生活』一九四七年二月）

40 高見順「わが胸の底のここには」（『文体』一九四八年五月）

41 坂口安吾「もう軍備はいらない」（『文学界』一九五二年一〇月）

42 福岡弘彬「焼鳥と非軍事――坂口安吾「もう軍備はいらない」論――」（『京都語文』二〇一九年一一月）

43 大澤真幸「ナショナリズムと「ふるさと」」（坂口安吾研究会編『坂口安吾　復興期の精神・〈いま〉安吾を読むこと・』双文社出版、二〇一三年五月）

44 坂口安吾「帝銀事件を論ず」（『中央公論』一九四八年三月）

45 松田修「母胎への旅――狂気と酩酊」（『ユリイカ』一九七五年一二月）、柄谷行人「安吾その可能性の中心」（『言葉と悲劇』一九九三年七月）、原卓史「坂口安吾「文学のふるさと」論」（『高知大学国文』二〇一五年一二月）など。

46 佐々木基一「現代作家論　坂口安吾」（『群像』一九五一年一一月）

47 花田俊典「〈信〉の領分――坂口安吾「文学のふるさと」論のために」（『敍説』一九九三年一月）

48 井口時男「物語が壊れるとき――坂口安吾と小林秀雄」（『群像』一九八六年一一月）

49 ウラジミール・プロップやA・グレマスなどは民話を物語の典型として扱うが、ここで井口が想定している民話はそれとは異なる。プロップやグレマスが想定する民話には、問題が解決されハッピーエンドにいたるものも含まれているが、井口はそれとは対照的に、理不尽な結末を迎えるものを民話として想定している。

50 安吾と戦争については、野上元「戦争」（安藤宏・大原祐治・十重田裕一編『坂口安吾大事典』勉誠社、二〇二二年六月）を参照。

51 「殺人鬼小平の犠牲に娘七人　五番目に最初の犯行自白」（『読売新聞』一九四六年九月二八日）

52 柄谷行人「現実について――「日本文化私観」論」（『文芸』一九七五年五月）は「帝銀事件を論ず」について、「戦争中とか戦後といった区分をすこしも感じさせない」といい、安吾が爆死体を処理する青年たちの光景に、「予想していたものとはまったくくい違った」「《現実》」を見ていたと指摘している。ただし、柄谷は戦中、戦後という時代区分についてを問題としているわけではない。

53 坂口安吾「二合五勺に関する愛国的考察」（『女性改造』一九四七年二月）では、「焼け死んだ大きな焼鳥のような無数の屍体」を「無感動」「無関心」に「見物し、とりかたずけていた」安吾の体験が書かれている。